

Origins 2014 に参加して

細川 洋一

豊田中央研究所 白杵特別研究室

(Received: August 4, 2014,

Accepted: October 10, 2014)

今回始めて参加しました。元々最初の生物はどのように誕生したのか、昔から興味を持っていました。中学生の頃、視聴覚室で生命の誕生についてのビデオが上映され、初期地球環境を模した Miller の放電実験を見たのが印象的だったのを思い出しました。元となるアミノ酸が生成し、高分子量の有機物が出来て生命が誕生したという話だったと思いますが、物質が生き物になる段階が腑に落ちなかった記憶があります。そして現在、研究者として有機合成をベースに有機・無機物を扱っていますので、参加した動機は未知の物質・材料、仕組みへの興味ということではあります。普段扱っているからこそ非生物がどのように生物になったのか、ますます不思議でしょうがない、そんな思いも心の奥底に持ちながら、今はどんな話になっているのか楽しみに参加しました。

6日間という長い日程でしたが、濃密な毎日であつという間でした。オープニングセレモニーで見た能は日本人ですが初めての体験で、静と動の洗練された伝統芸能の凄さ、迫力を感じました。各セッションでは世界中から惑星科学、地球化学など異なる分野の専門家が集まり、宇宙における有機低分子の発生から高分子、更に自己組織化した複雑な集合体までその形成メカニズムについて各分野の観点から活発に議論されており、大変興味深く聴講しました。夜に開かれたパネルディスカッションでは魂というか、精神的な話も出ていましたが、西欧の研究者は聖書にある「光あれ」という創造の教えとはどのように整合取るのか気になりました。ポスターが中3日間掲示され、二日に分けて議論する時間があつたのは、気になる発表者全てと十分にコミュニケーションできて大変良かったです。

将来のエネルギーや CO₂ 排出など地球規模の環境問題が懸念される中、トヨタグループは持続可能な社会・ものづくりを目指しています。自動車業界はかつて排ガスが大きな問題となったことがありますが、現在では省エネルギー・CO₂ 排出量削減を課題の一つとしてプリウスのようなハイブリッド車や、CO₂ を排出しない燃料電池車の開発に取り組んでいます。物質の誕生から変化・循環プロセス、そして生命との繋がりを地球・宇宙規模で研究する本分野への理解を深めることは、環境調和型のプロセス・製品開発やエネルギー・社会システムを考える上で非常に重要で、今後も注視していきたいと考えています。最後になりましたが今回の準備をして



下さった幹事の先生方を始め学生スタッフの皆様感謝致します。大変有意義な時間を過ごすことができました。今後の先生方のご活躍、学会の発展を期待しております。ありがとうございました。

Origins 2014 に参加して

高橋 絢子

(大阪大学大学院理学研究科 宇宙地球科学 専攻 修士課程 1 年)

(Received: August 11, 2014,

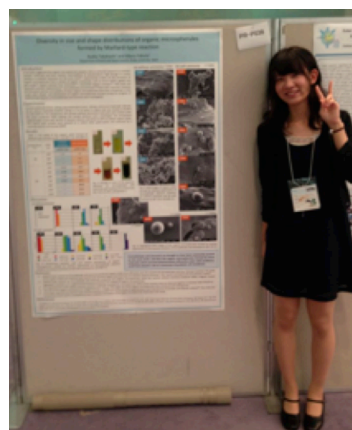
Accepted: October 10, 2014)

7月6日から一週間ほど「Origins 2014」に参加してきました。私にとってはわずか二度目の学会参加経験、初めての国際学会でのポスター発表、初めての学会アルバイトということで前日までとはとても不安だったのですが、学会を終えた今では参加して本当によかったと感じています。

アルバイトでは主に学会参加者のレジストレーションの手伝いをしました。仕事内容は理解していても、いざ目の前に外国人が来ると言葉に詰まってしまうたり相手の言っていることが聞き取れなかったり…。それでもジェスチャーや簡単な英語で説明をすると「Thank you!」と言って笑顔を見せてくれる方も多く、学会も後半になると「下手な英語」で話すことに全く抵抗がなくなっているのを感じました。今までこのように外国人に囲まれてフリーな会話をしたことが無かったため、完璧な英語でなくても海外の人々とコミュニケーションをとることができたのは私にとって新鮮な感覚でした。

しかしポスター発表の時にはそうはいきませんでした。私は Prebiotic chemistry セッションに「Diversity in size and shape distributions of organic microspherules formed by Maillard-type reaction」というタイトルで要旨を申込み、初期地球上での分子自己集合による微小球状有機物形成について研究発表を行ったのですが、研究の議論となると細かい部分まで正確に伝えることが必要で、そのためには語句や文法の正確さも必要であったため苦労しました。聞きに来てくれた方の中には、私の拙い英語でも目を見て聞いてくれて、面白い研究だと言って下さる方もいましたが、なかなか思ったような説明ができず、準備不足だったなと反省しています。

アストロバイオロジーの研究の難しい点に、多くの関連分野からのアプローチが必要とされることが、それらの間の情報交換が欠かせない事が挙げられると思います。今回の学会では私の研究に近いものから遠いものまで、



火曜日お昼のポスターセッションにて。

非常に様々な研究者の講演を聞くことができました。身近に同分野の研究者があまり多くないため、今回聞くことができた講演はどれも刺激的なものでした。学会期間中、同年代の学生たちとも交流することができ、アストロバイオロジーを研究している学生と SNS 上のグループを作ることができました。そのおかげで学会やイベントの情報をみんなで共有することができています。(興味のある学生の方は Facebook で Asbee というグループを探してみてください。参加は自由です。)

学会を通して、たくさんの方が私の研究に興味を持ってくださり、自分自身の研究にとっても自信ができました。より魅力的な研究成果を出し、より多くの方に私の研究を知ってもらいたいと思っています。この自信と反省を胸に今後の研究を頑張り、また機会があれば国際学会にリベンジしたいです。この度は学会参加の貴重な機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

Origins 2014 に参加して

大澤祐太郎
九州大学・理

(Received: August 11, 2014,

Accepted: October 10, 2014)

Origins 2014 は 7 月 6 から 11 日にかけて奈良県新公会堂で行われました。今回の学会は私にとって初めての Origins 参加&学会発表だったので、期待と不安を抱えながらの参加となりましたが、終わってみるとそれはとても有意義で濃い時間でした。この度はこのような場を頂き、自分が見たことや感じたことを述べさせて頂きたいと思います。

Origins 2014 に参加しての一番の驚きは、その分野の広さです。生命の起原を探るという共通の課題のもと、様々な分野の研究者たちが学会に参加し、熱い議論を交わされていました。生命の起原という複雑系の科学に取り組むためには、多角的な分析・研究が重要であり、幅広い分野からの

アプローチが必要だと思います。その一方で、あまりにも幅が広くなりすぎて、違う分野の研究になるとほとんど理解できなくなることもしばしばありました。また、このような大きなテーマを研究するうえでは、分野間の垣根だけでなく国さえも跨いで研究を進める必要があります。本学会に参加して、様々な分野を統合した研究を国際的に進める難しさをひしひしと感じました。特に、日本人には言語的な問題があります。全てが語学力のせいであるとは思いませんが、コミュニケーション能力も研究者にとって重要です。議論になると欧米の研究者の勢いに負けてしまっているように感じる場面も少なくありませんでした。また、参加学生のほとんどが修士や博士過程の人たちで、学部生がとても少なかったことも残念でした。早いうちから Origins のような大きな国際学会に参加し、世界中の研究者たちがどのようなことをして何を解明しようとしているのかを知ることが、先に述べたような、様々な分野に精通し統合的に考える力や海外の研究者と対等に議論する力を付けるための重要なステップの 1 つだと思います。それにも関わらず学会は院生になってからという考えが一般的で、それが学部生の積極的な学会参加を妨げているような気がします。将来、世界で通用するような日本人研究者を育てるためにも、もっと学部生に注目し、支援していく姿勢が必要なのではないかと感じました。

いろいろと述べてきましたが、初めての Origins 参加は私のなかでとても貴重で有意義なものとなりました。なによりも世界中の熱意ある研究者たちが生命の起原という難問に挑むために、アイディアにあふれた研究を協力して行っていることにとても刺激を受けました。それが本学会に参加して得た一番の成果だと思います。ISSOL 会長である Pizzarello 先生や学会運営委員長の池原先生をはじめ、運営・進行に携わった全ての先生方に、このような貴重な機会を提供して頂き、本当に感謝致します。次回もぜひ参加させていただきます。



将来を担う日本の学生たち@Origins 2014 (奈良県新公会堂).